

おはようございます。クロスウェイ教会牧師の玄と言います。今日は、井下先生が休暇中ということで、お招きいただき、ありがとうございました。井下先生には、去年の夏、私がサバティカル中に、私たちの教会でメッセージを取り次いでいただきましたので、今回はお礼の意味も込めて、来させていただきます。

ウェストコビナ教会には、これまで何度も足を運ばせていただいています、実はこうして講壇に立たせていただくのは、今日が初めてだと思います（私の記憶が正しければ…）。すでにお会いしている方もいますし、初めての方もおられると思いますので、簡単な自己紹介をもって始めさせていただきます。

私は、1979年、在日韓国人の三世半として大阪で生まれ、未信者の家庭で育ちました。高校卒業後、今私が住んでいるサンタクラリタに留学し、そこでの家庭集會に誘われ、現在サウスベイ教会で牧会しておられる鍵和田牧師を通して1999年の夏に救いの恵みにあずかりました。その一年半後に、献身し、東京聖書学院での学びを経て、2006年から5年半、アリゾナ・ツーソンの教会で牧会しました。

2011の夏にロサンゼルスに引越して来まして、私の母教会であるサンファナンド（今はクロスウェイ）で牧会を始め、この夏で6年を終えようとしています。井下先生と同じで4人の子どもがいますが、性別は反対で、上の三人が男の子で、末が女の子です。「5人目は？」と聞かれることもあります、それは神様におゆだねしています。それでは、一言お祈りをして、みことばに耳を傾けさせていただきます。

今日開いたみことばは、とても有名なところですので、皆さんの中でも多くの方がすでにご存じの所でしょう。これをご自分の愛称聖句にしておられる方も少なくないと思います。では、どうでしょうか？このみことばが好きとか嫌いに relationship なく、今日、あなたはこのみことばに従っておられますか？あなたはいつも喜ぶこと、絶えず祈ること、すべての事について、感謝することをおられるでしょうか？

神様は、私たち信仰者たちが、そのような者であることを望まれると、この手紙の著者パウロはいうわけですが、あなたはこのみことばをどのように受け止めておられますか？「何としても守り行わないと不従順になる」と言って律法的に受け止めておられるのでしょうか？「喜ばないと。祈らないと。感謝しないと」と。それとも、「そんなこと不可能だ」と言って従うことを最初から諦めておられますか？神様ご自身は、このみことばの中に、どのような意味を込めておられるのでしょうか？

それを知る鍵となるのが、18節の「感謝しなさい」の後のことばだと思います。「これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」。ここに「キリスト・イエスにあって」ということばが出てきます。つまり、神様は、私たちに対して、これらのことを漠然と望んでおられるのではなく、「キリスト・イエスにあって」、私たちがそのような者となることを望んでおられるのです。

「キリスト・イエスにあって」とはどういう意味でしょうか？それは、キリスト（救い主）である主イエスのうちにある者、つまり、キリストのもの、彼に属する者であるということです。もっというなら、主イエスこそ、私たちをして罪赦され、神の子どもとされ、天の御国を相続できる理由であるということです。そのように「主にあって」とは、私たちが主と一つにされているということです。ですから、私たちに対して神様が、いつも喜び、絶えず祈り、すべての事について、感謝することを望まれる時、それは私たちが主イエスのうちにあることによって、彼と一つにされることによって初めて可能となります。

そう捉えると、これらのことが、主を信じて神の子どもとされた者たちに与えられた特権であることがわかります。「当然そのような者となる」ということが、前提とされているので、命令形で記されているわけです。神様は、私たちがいつも喜べるよう、絶えず祈れるよう、すべての事について、感謝できるよう、ご自分のひとり子を与え、彼によって私たちを救って下さいました。いつも喜ぶことが困難で、祈りの力よりも人のすばらしさを誇り、感謝よりも不平や不満に満ちた、暗やみのこの世にあって、私たちが主にあって喜び、祈り、感謝する者として神様の栄光を輝かせるためです。

どうぞ「いつも喜んでいなさい」のすぐ前の 15 節を見て下さい。「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ…」とあります。なぜ私たちはいつも喜ぶことができないのでしょうか？それはこの世に悪が存在するからです。このことは、感謝することも同じですが、私たちのまわりには悪が存在するゆえに、いや、外だけでなく、私たち自身の内側にも悪（罪）が存在するゆえに、私たちは喜べる時もあれば、でもそれが必ずしも「いつも」というわけにはいかない、悪それ自体を喜ぶわけにはいかないからです。

私たちは、悪に対して正しい怒りをもつべきです。悪はどんな悪でも喜んではいけません。でも、悪が存在する中でも喜ぶことはできます。なぜなら、その悪に勝利された主イエスがおられるから、彼によって私たちはこの世から救われているからです。もはやこの世のものではなく、主に属する者とされているゆえに、私たちはこの世の悪の中にあっても、主イエスにあって、主ご自身とその救いを、いつでも喜ぶことができます。

ですから、信じて救われた後も、この世にあってはさまざまな困難に遭います。それ自体は決して喜べない苦しみや痛みの経験をすることが実際にあるのです。でも、だからこそ、すべての悪に打ち勝たれた主イエスを見上げる必要があります。主が、その苦しみのただ中でも共にいて下さり、聖霊とみことばをもってご自身の平安と喜びを与えて下さるからです。

そのようにして、私たちのうちに主ご自身を喜び、その救いを喜ぶ心があるなら、そこから主をもっと知りたい、彼に近づきたい、という切なる求めが生まれてくると思うのです。主との絶え間のない祈りの関係は、そのように主を心から呼び求めるところから始まっていきます。祈りとは、会話です。それは、私たちが一方的に自分の願いを告げることではなく、主のことばに耳を傾けることもその大部分を占めています。

なぜ神様は、ご自分の子どもたちに絶えず祈ることを望まれるのでしょうか？それは、祈りを通して、私たちにご自身をわからせて下さるためです。つまり、私たちは、祈りを通して神様がどのような方かを知るようになります。神様が私たちの祈りに応えて下さるからです。でも、どうですか？私たちの祈りは、神様が聞いて下さるほどに、すばらしく価値のあるものですか？主イエスの祈り、また弟子たちに教えられた祈りを見るなら、私たちの祈りがいかに自己中心なものかは、容易に知ることができます。もし神様がその祈りにそのまま答えられたら、それこそ世界は混乱に陥ってしまう！と思うのは、私だけでしょうか？

にも関わらず、私たちは絶えず、つまり、いつでも、どこでも祈ってよい、神様に近づいて良いのです。そのことを神様が望んでいて下さるからです。新約の時代、特に今の時代の私たちは、このことが当然のように見え、そこに特別さを見ないかもしれません。でも、旧約聖書を見るなら、それがいかにあり得ないことかがわかります。罪ある者は、だれも聖い方に近づけなかった。神様に近づくことができたのは、いけにえを携えた祭司だけ、もっと言うと、年に一度、大祭司だけがいけにえの血を携えることで聖所の中にある至聖所に入ることが許されました。

でも、今は違います。なぜですか？まことの大祭司である主イエスが、十字架にかかり、流されたご自身の血をもって私たちのための贖いを成し遂げて下さったからです。ですから、私たちはこの主にあって、彼への信仰によって、いつでもどこでも大胆に祈りを通して神様に近づくことができます。これが特権でなくて何でしょう？今日あなたは、神様との祈りの関係をそのように特権として理解しておられますか？神様との祈りが、そのように生きた交わりとなるなら、祈りはもはや時間や場所を超え、絶え間のないものとなるはずで

主イエスは、ご自分と父なる神様とは、一つだとおっしゃい、また父なる神様は主のことを「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」と言われました。私たちは父なる神様と主イエスが一つであられたように、祈りを通して父なる神様に近づくことができます。そして、父のみこころを知るようになるのです。なぜ主イエスはご自分が十字架で死なれることを知りつつ、それを避けるのではなく、自ら進んでそこに向かわれたのでしょうか？その十字架の先に、私たち罪人が救われることを喜びとして見て下さったから、それが父なる神様のみこころであり、その救いのご計画は必ずなると確信しておられたからです。

私たちも父なる神様のことを、そのように知り、この方に自分自身をゆだねることができたら、たとえ自分の意に反するような境遇に置かれたとしても、主に信頼するゆえに、感謝することができるのではないでしょう

か？18節の「すべての事について、感謝しなさい」とは、そういうことです。すべての事、それ自体を感謝するのではなく、すべての中で、つまり、いかなる境遇の中でも、感謝するということです。

なぜ私たちは、いかなる境遇の中でも、感謝できないのでしょうか？なぜ感謝よりも、不平や不満がでてくるのでしょうか？それは自分が置かれている状況によって、それが自分に災いをもたらし、将来さえも脅かすと考えるからではないですか？そして、究極的には、その先に死という暗やみを見るゆえに、自分でどうにかしようとし、でも、どうにもできないので、感謝することが困難に思えるのではないのでしょうか。

このテサロニケの手紙は、再臨が一つの大きなテーマになっています。それは、この教会の中に、主の再臨の前に、死んでしまった兄弟姉妹がいたから、彼らがどうなってしまうのかという心配や恐れがあったからです。死の現実を前に、悲しみにくれている人がいたからです。痛みや苦しみという逆境の中で私たちは死を意識します。でも、信仰者にとって、この肉体の死は決して終わりではありません。それは永遠への通過点であって、眠りにつくことに過ぎません。眠りから覚める時、それが一瞬であったかに思えるように、私たちは眠りについても、目を覚ます時、愛する主イエスと顔と顔を合わせるようになるのです。

この復活の希望のゆえに、私たちは、この世にあって、すべての事の中で感謝をささげることができます。私たちのために、御子イエスを十字架の死に明け渡すことまでして下さった父なる神様は、御子と一つである私たちを見捨てられるはずがないからです。そのような救いの確信、主への信頼は、どこから来ますか？それは私たち人から出るものではありません。今日の箇所のお話のすぐ後の 19-20 節「御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません」。

主イエスは、「御霊はわたしの栄光を現わします」（ヨハ 16:14）と言われました。私たちの罪を示し、でもそこに主の恵みを示すことで、主がいかにすばらしい方かをわからせて下さるのが御霊です。そして、預言とは、みことばのことであり、それは救い主を指し示すものです。つまり、御霊を消さず、預言をないがしろにしないということは、私たちが御霊の助けを信じ、キリストのみことばに聴くことです。そうすると、そこから主への信仰が始まり、その信仰の管を通して神様は、私たちが主にあっていつも喜べるよう、絶えず祈れるよう、すべての事について感謝できるようにして下さいます。主イエスこそ、この悪の世にあって、私たちがいつも喜べる、絶えず祈れる、すべての事について感謝できる理由であり、また力です。このお方をほめたたえようではありませんか。